

2021年度第1回例会 講演「気候変動影響への『適応』—京都気候変動適応センターの取り組み—」

日時 11月6日(土)13:30~15:00 会場 ウイングス京都

講師 一原雅子さん(京都支部会員/京都気候変動適応センター研究員)

出席者 17名(支部会員13名、ゲスト4名)

高橋前支部長の司会で始まった例会では、最初に前支部長からの挨拶がありました。

「京都支部ではコロナ禍のなか、書面又メールなどで活動を繋いで参りましたが、今年度4月からは承認を得て久保新支部長をはじめ新役員にバトンタッチをして活動を引き継ぎました。それまでは皆様にご協力を頂き有難うございました。

今イギリスではCOP26の会議が行われています。また、今年のノーベル物理学賞を真鍋淑郎さんが物理学賞としては珍しい気象学における成果によって受賞されました。そのようなこの時期に京都支部の会員である一原さんが「京都気候変動適応センター」の研究員として頑張っていらっしゃるということで、早速に今日のご講演をお願いしましたところ快くお引き受けくださって本日の運びとなりました。」

続いて久保支部長から、開会の挨拶と講師の紹介がありました。

「皆様、こんにちは。やっと本日、対面で今年度第1回の支部例会を開催することが出来ました。もう2年近くなるコロナ禍のなかで皆様いかがお過ごしでしたでしょうか。

色々な制限のなかで、何もできないもどかしさなど多くありましたが、一方自分の足元を見つめ直す機会を得て新たな発見もあったのではと思います。まだまだ続くであろうコロナ禍の社会をどう生きていくか大切な指針をお持ちになられたのではと思います。

大学女性協会もこの状況の中では活動もオンライン開催が多くなっています。オンラインは居ながらにして全国の皆様とご一緒できるメリットはありますが、やはり実際にお会いしていないことはお互いの温かみを直に感じられず何か寂しい思いがいたします。

さて、世界ではこの10年あまりコロナのパンデミックばかりではなく大きな自然災害が地球のどこかで発生して地球がどんどん壊されていくように感じます。地球が壊れるということは人をはじめとした生命体の死滅という恐ろしいことに繋がります。

そこで今日は、地球環境の最前線で研究されていらっしゃる一原雅子さんのお話を伺うことにいたしました。」

一原雅子さんのプロフィール

京都大学法学部、法学研究科終了

東京大学法学部政治学研究科法曹養成専攻終了(法学博士)

京都大学大学院地球環境学舎博士後期課程修了(地球環境学博士)

現在、総合地球環境学研究所研究員として京都気候変動適応センター勤務

研究テーマは気候変動訴訟

I 講演

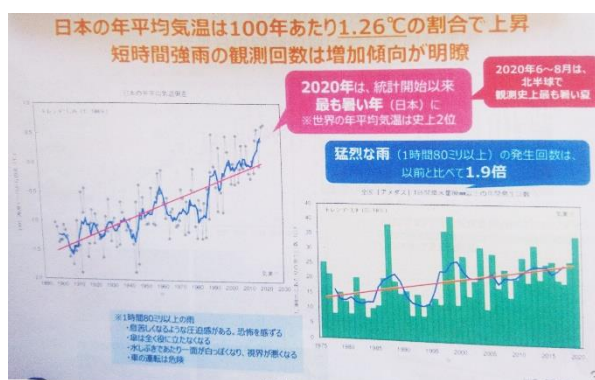
ようやく対面で実現できた今年最初の例会では、今年の夏創設されたばかりの京都気候変動適応センターで活躍されている新進の研究者一原さんにお話しいただきました。今最もタイムリーな気候変動というテーマについて、「COP26 も開催されている中、脱炭素をして地球温暖化を止めるべきだと言って力を入れてきましたが、ここに来てなかなか間に合わない中で、私たちの生活自体を変わらぬ気候に合わせていかなくてはいけないのではということで、「適応」ということを考えることになりました。」と話を切り出されました。



① 気候変動の現状

IPCC（気候変動に関する政府間パネル）第6次評価報告書（2021年公表）には、「人間の影響が大气、海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない」と明記されている。世界が仮に脱炭素を達成しても、温暖化はすぐには止まらない。

日本では去年統計開始以来、年平均気温が最も高く、1時間に80ミリ以上の猛烈な雨の発生回数も1.9倍になった。京都でも猛暑日の回数が増加している。このような気候変動の影響により、洪水の増加・河川の水質悪化・作物生産量の減少が起これ、それによって生物の多様性の低下・森林火災の増加・害虫の増加やインフラ被害がもたらされている。



② 気候変動への「緩和」と「適応」

「緩和」：気候変動の原因となる温室効果ガスの排出削減対策

「適応」：既に生じている、あるいは将来予測される気候変動の影響による被害の回避/削減対策



環境と良い関係を長く保てるような新しい社会のあり方を、生活の場である地域から考えていくことこそが「適応」の持つ意義だと考えられる。

③ 京都気候変動適応センターについて

講師が研究員として務めておられる京都気候変動適応センターは、「気候変動適応法」

(2018年制定)に基付き、地球環境学研究所内に設置された。

- 1) 気候変動の影響と適応に関する情報の収集・整理・分析及び発信
- 2) 大学等の研究機関と連携した京都における気候変動の影響と適応に関する最新の知見の集約及び影響の予測
- 3) 府市の産業関係機関等と連携した適応策の自立的な普及に向けた適応ビジネス創出の支援等を主な業務としている。

④ センターの取り組み

現在は主に府立高校、農業改良普及センター等で、ヒアリングやワークショップ等による情報収集を行っている。「高等学校に講演に行った時、『僕たちがこの行動を知ったって、世界の気候変動は変わらないのでは?』という質問を受けましたが、実際にそう思う人が多いのです。しかし、一人のすることはわずかでも、またその人の周りに影響を与えて、世代を超えて広がっていくのです。」と体験を述べられました。

その後、収集した情報の分析、研究により、京都に特徴的な気候変動の影響の解明を進め、オンラインセミナー、センター通信の発行等により、市民、事業者に向けた情報の普及、啓発を進める。

⑤ 今後の課題と展望

- 1) 地域に即した適応のあり方を府民と共に探る
 - 2) 気候変動の影響と、後継者不足・人口減少・コロナ禍等別の問題が複合している課題との向き合い方を探る
 - 3) 消費者側と企業側との視点のマッチング
 - 4) 気候変動に関心を持たない人々にどのように訴えかけていくか
- 等々課題は多くある。

⑥ 私たちにできること

最後に気候変動という不安な時代にあって、私たちにできることを具体的に提言していただきました。「私はある夏の暑い日に一歳の長女を連れて公園で遊ばせようとした時、まだ午前中なのに、滑り台が熱くて滑ることができませんでした。そのショックを受けたことが、気候変動を考え始めた瞬間です。」と話され、気候変動が「自分事」になった経験から、以下の提案が出されました。

- 1) 先ず自分のこととして気候変動問題に関心を持つ
 - 2) 「知る」から一歩踏み出して行動しよう
 - 3) 思いを共有できる団体に加わってみよう
 - 4) 世界を自分の生活領域の延長として想像しよう
- そして、大学女性協会に属している私たちに

- 1) 後継の女子学生への支援の充実
 - 2) 政府等への要望書の提出
 - 3) 国際会議への発信
 - 4) 世界各地の連携機関との協働
- 等の活動を示して、講演を締めくくられました。

II 参加者からの意見・感想

本日唯一の男性参加者からのご発言を皮切りに、多くの参加者から活発に意見や感想が述べられました。

「キーワードの気候変動の緩和と適応の問題は車の両輪のようなものだが、何故昔はこのような地球環境問題があがってこなかったのか。振り返ってみると、昔の生活は生ゴミを肥料として使い、そしておいしい野菜を楽しんで作り食していた。これはいわゆる緩和策なのであるが、と同時に自然の循環の中に入れてそれを楽しんでいる。これは適応になるわけですから、つまり緩和と適応は一体化している。

だから今、基本の衣食住の生活のレベルで言えば、昔のことを思い出して見直す事が大切ではないか。適応には限界があるので、それに持ち込まないような緩和策とつねに組み合わせで考えていかななくてはいけない。」

「科学技術の進歩で人間の利便性を求める生活を飽くことなく追求してきたツケが今、私たちの前に突き付けられています。1990年代にJAUWでもセミナーに地球汚染の問題を取り上げ、京都支部でもささやかな調査検討をレポートしたりしました。しかし、経済優先の世界的風潮の中では、CO₂排出減少運動は延々として進まず、温暖化による気候変動、更には災害を頻発している現状です。そうしたことへの適応した対策もない現況に苛立ちを覚えます。

講演を伺って気候変動の厳しい現状がよく理解でき、少しでも進行阻止の為に私達市民ができる行動を具体的に示した指導をお願いしたい。」

「今、グラスゴーでCOP26が開催され世界のトップが集まり、地球温暖化対策を協議していますが、私たちの期待するような成果が一つも見えてきません。それぞれ自国の利害のことばかりにかかわり、地球のことを同じレベルで考えていないのです。

これからの時代を思うと、今は子供たちへの環境教育を充実することが大切だと感じます。純粋な心を持つ子供たちに向けて、地球温暖化の現状を分かりやすく説明できる機会をぜひ提供していただきたいと願っています。」

「今世紀は経済重視、効力重視の動きをしている中、世の中を変えていくことは非常に難しいですが、高齢者など時間に余裕のある者は、昔のことを思い出していろいろ試してみるのも温暖化解消の一つの方法かもしれません。

ネットで世界中がつながっていることを利用して、地球温暖化防止に向けての取り組みを世界が一つになって取り組めたらと思います。」

「小さな子供たちの時代から地球変動について認識することは大切なことです。“もったいない”という言葉が日本では昔からよく言われていましたが、これは一方ではケチという意味合いもあります。しかし、物を大切にする良い意味もあります。この良い意味をしっかりと伝えていきたいものです。」

最後に島田副支部長のあいさつと一原さんへの拍手をもって、例会を終了しました。

「本日一年ぶりで対面での例会を持つことができたことをとてもうれしく思います。コロナのこともあり例会の計画が立たず、急なお願いをしましたのに快くお引き受け下さった一原さん、ほんとうに有難うございました。

本日は今最もタイムリーなテーマにつきまして詳しい資料も用意していただき、深くわかりやすくお話しいただいて、改めて気候変動の影響を認識し考え直しました。自分の生活を身近なところから少しずつでも見直していきたいと思います。

又貴重なご意見をフロアーからもたくさんいただき、有意義なひと時をもてたのではと思っています。

次回の例会は未定ですが、コロナの様子を見ながら是非開催したいと思います。

例会が決まりましたらご案内をさせていただきますので是非ご参加ください。」

